

なぜ今、イブラヒーム・サミュエルなのか？

岡崎弘樹

本書は、シリア人作家イブラヒーム・サミュエルがデビュー作としてダマスカスのジュンデイ社から一九八八年に刊行した短編小説集『あの重い足音のにおい』(Rai'iat al-khaiwi al-thaqil) の邦訳である。サミュエルは、一九九〇年に二作目『咳払い』(Al-nahmahat)'、一九九四年に三作目『青き荒野』(Al-wa'r al-azraq)'、二〇〇二年に四作目『低い入り口の家』(Al-manzil dha-l-makhal al-wati') と短編小説集を継続的に発表し、一九九九年には評論集『紙上の空間』(Fadda'at min waraq) も刊行している。これらの作品はエジプトやヨルダンの出版社からも改訂出版され、『あの重い足

音のにおい』は一九九七年にイタリア語に、『青き荒野』は二〇一二年にフランス語に、その他一部の作品が英語やオランダ語、ブルガリア語などに翻訳されている。邦訳の刊行は本書が初めてである。

イブラヒム・サミュエルは一九五一年、ダマスカスに生まれた。幼少時から無類の本好きであり、小中学校の頃には親に渡されたお昼のサンドイッチ代をも本の購入代に充てていたらしい。一九六八年にシリアの主要紙の一つ『サウラ』で最初の短編「新しい洋服」を発表。ダマスカス大学哲学・心理学部に入学して当時の進歩的な思想に啓蒙を受けたのもその頃である。だが、サミュエルが本作品集にみられるような自らの作風を確立していくのは、それから約十五年以上経てからである。

一九六七年の第三次中東戦争における「アラブの敗北」以後、それまで政治スローガンとして掲げられてきたアラブの統一やパレスチナの解放といった、原書に「巻頭の辞」（本書では「解説」として巻末に収録）を寄せた劇作家アドワーンが言うところの「大義」<sup>カデイヤ</sup>はもはや有名無実化しつつあった。ハーフェズ・アサド政権は、一九七

六年にレバノン内戦に介入してパレスチナ解放運動を弾圧する一方で、国内でも世俗主義的な反体制派勢力やイスラーム主義勢力に統制を強めていった。一九八二年に同政権は、中部のハマ市においてムスリム同胞団員とともに市民をも大量殺戮し、犠牲者は八千人から最大で四万人と言われ、八〇年代前半だけでも全国で政治犯として収容された人数は一万七千人に上ると推計される。

このようにシリア人がシリア人や同胞のアラブ人を弾圧し始めた一九七〇年代半ば、サミュエルはアサド政権を批判する世俗的な青年運動組織「共産党行動派」に入党した。本書所収の「箱」にみられるように、「画家やジャーナリストとして後に名を知られるようになる友人らも、この政党の同志として活動に加わった。だが「墓地」に描かれるように、全国各地に亡霊アッシュューバフのように展開する治安機関員や密告者のネットワークによって党員が次々と逮捕されていき、サミュエル自身も身を隠さざるを得なくなり、一九七七年について拘束された。一九八〇年まで三年間にわたって収監生活を強いられたが、この経験が諸作品に反映されていることは明らかである。

アドワーンの言う通り、サミュエルの作品には、それまでのシリア人作家や政治活動家の手記にみられたような、お決まりの監獄の描写は皆無である。たとえばナビール・スレイマーン<sup>(1)</sup>の小説『監獄』(一九七二)において、主人公は拘束、収監、尋問、拷問、独房、地下牢、雑居房への移送、他の囚人との共同生活、対立や和解、そして釈放までの一連の流れを経験する。活動中に掲げてきた政治的なスローガンと家族や恋人との実存的生活の間で葛藤しながらも、苦難を耐え忍び「大義」<sup>カディヤ</sup>のために再び立ち上がる英雄として語られる。

これに対しサミュエルは、「ささやかで私的で個人的な細部であるがために、政治的スローガンよりもいっそう人間的」(本書一四四頁)とアドワーンに言われるところの、新しい「課題」<sup>カディヤ</sup>を作風にとり入れる。最も無垢な存在である子ども視点の軸に、極めて私的な状況、つまり愛する人や家族との関係、個人的な確執を、まるでカメラが捉えた写真や映像を見ているような描写を交えて、原文で十頁にも満たない紙幅に簡潔かつ鋭利に綴るのである。

アラビア語で「ハサーシーヤ」(hasasiyya)と呼ばれる傷つきやすいデリケートな感情の描写は、獄中生活に限らず、出獄後や獄外の日常空間に発露するシリア社会の深い矛盾をもえぐっていく。ハマ市の虐殺現場は明らかに市民の墓場であったが、そのアナロジイは当局に追われる主人公と恋人が迷い込んだ墓地として現れ、街や国全体が死霊漂う空間として暗示される。国の不安定さは市民にとつては経済的な苦難、食うや食わずの貧困生活という形で現れ、最低限の生活を取り戻すために妻が身を売る決意を固めた労働者の支離滅裂な態度などとして表現される。

サミュエル自身はキリスト教徒コミュニティの出身である。だが、獄中の雑居房生活で自分以外は皆ムスリム同胞団の政治囚であった一時期、彼らとともにクルアーン読解の会合や集団礼拝に自発的に参加したと回顧している。ドストエフスキーからの影響を自認する元共産主義者で世俗主義者の文学ではある。しかし、クルアーンにおける魑魅魍魎漂う世界観や悪魔やジンのささやき、砂漠の遠くにぼんやりと映し出される現実の人間と幻想が重なった「<sup>アシユバール</sup>似姿」の比喩など、アラブ・イスラーム世界の文

学的伝統も随所に反映されているように思える。

サミュエルの作品は、一九八〇年代後半にいわゆる「アラブ文学」から「シリア文学」がある程度の共通項を保ちながらも分派し、独自の存在感を示していく時代の産物でもある。小説家ザカリーヤ・ターミル<sup>2</sup>が純粹無垢な子どもや動物の視点を中心とした寓話作品で評価され始めた後、続くサミュエルらの世代は、獄中と獄外の心理的な連続性、「不可視の抑圧」に怯える市民のパラノイア、祖国のためにどれだけ努力しようとも祖国を祖国として感じられない圧倒的な疎外感といったテーマをとり上げる。作中に登場する主人公のモデルは決して作者自身とは限らず、むしろ作者が監獄や市井で出会った人々、すなわち異なる背景（社会階層や宗教宗派、政治志向）を持ちながらも同じ祖国で暮らす「他者」である。

二〇〇〇年代にはサミュエルの作品はラマダンのお茶の間で楽しまれるようにテレビドラマ化されたこともあった。サミュエル自身、アルフォーズ・タンジュール<sup>3</sup>監督の記録映画『カーキ色の記憶』（二〇一六）で主要な四人の語り手の一番手として登

場する。サミュエルの作品が数十年経っても若い世代のシリア人に再読されるとすれば、同じ社会に暮らす他者の苦しみに共感し、彼ら／彼女らに語らせ、シリアだけでなく世界のどこでも誰にでも起こりうる物語として再構成し、一般化する手法が文学的な手本として示されているからであろう。

二〇二四年十二月八日、五十四年間続いたアサド政権の崩壊によって、シリアの人々に感涙と安堵の瞬間が訪れた。二〇一二年以降ヨルダンで亡命生活を続けるサミュエル自身も体制崩壊に歓喜したが、その前の一週間は過去の人生を覆すあまりに根本的な変化を前にして高熱にうなされたという。だが、政権崩壊直後から様々な報道で、戦乱による死者五四人以上に加え、サイドナーヤ刑務所をはじめとする「アサドの監獄」の収監者を含め拘束・強制失踪者は一三万人を超え、うち一〇万人以上は依然として行方不明という衝撃の事実が伝えられた。生存者であっても、家族や仲間を失い、精神の奥底に深いトラウマを抱え、普通の生活に戻ることのできない人々は数えきれない。

サミュエルらの世代が取り組んできたシリア人自身の「文学的な語り」は、今改めて見直される時期にきている。シリア各地の実際の監獄だけでなく、祖国そのものが監獄や墓場となった時代の記憶は、シリア国民の「負の遺産」、二度と同じ過ちを繰り返さないための「悔恨の記念碑」<sup>(4)</sup>として保存され、絶えず想起されることが求められている。その意味で、サミュエルの作品は、シリア国民が過去のトラウマから回復し、祖国を祖国として、つまり「アサドのシリア」ではなく「シリア人のためのシリア」として取り戻すための文化的な遺産として読み継がれることになるだろう。

【注】

(1) ナビール・スレイマーン シリアの小説家・文芸評論家(一九四五―)。タルトゥース出身で、小説と文芸批評を合わせて四十点を超えるほどの多作で知られる。

(2) ザカリヤ・ターミル シリアを代表する短編小説家(一九三一―)。邦訳作品に『酸っぱいブドウ／はりねずみ』(柳谷あゆみ訳、白水社、二〇一八年)など。

(3) アルフォーズ・タンジュール シリアの映像作家(一九七五―)。代表作『カーキ色の記憶』は、二〇一七年の山形国際ドキュメンタリー映画祭のインターナショナル・コンペティション部門に出品され、山形市長賞(最優秀賞)を受賞。

(4) 『悔恨の記念碑』 この問題提起については、シリア人作家ヤシーン・ハージュ・サーレハ『シリア獄中獄外』(岡崎弘樹訳、みすず書房、二〇二〇年)を参照。